

研究発表 1

西田幾多郎の「偽我」を包含した「私」概念

——木村敏の西田解釈を手がかりに——

藤田伸太郎（静岡大学大学院修士課程）

近年の自己論においては、自己の社会構成主義的な見方、すなわち自己を対象的にとらえ、外部環境や他者との相互関係から理解しようという傾向が強い。そのため、自己の主観性が軽視される傾向がある。そこで本発表は、こうした傾向に対して西田幾多郎の自己論を、自己の主観性に根差しながら自己の対象性を包含するような自己を論じた議論として再解釈し、自己における主観性と対象性との共存したあり方を主張することを目的とする。そのためにまず、従来の西田哲学解釈に対して西田初期の主観主義的自己論に立ち返り、西田哲学を再検討する。

西田の論じた自己については、晩年の世界の内から実在を考える「物となって見る」「行為的直観」という概念に即して、初期の主観主義的・心理主義的性格を脱却し、物や他者、世界と等価で相互に創造し合う対象的な性格が獲得された事実が強調されがちである。これにより、西田の自己においては、西田哲学にとって切っても切り離せない「心理主義」的性格、すなわち初期から根強い自己の主観的側面の重視がその本質としてあることが、むしろ、見逃されているように思われる。

そこで本発表では、『善の研究』での「偽我を殺し尽し」「真の自己を知る」という善の説明に立ち返り、「偽我」という自己の構成的・対象的な側面を否定し尽くすことで成り立つ西田初期の主観的自己像に即して、その後の西田哲学の変遷を再考し、西田の自己論を再考したい。具体的には、次作以降表現として姿を消す「偽我」の足取りを西田哲学の変遷に沿って考察することで、西田の自己は、単に物や世界と等価の相互性・対象性を獲得するところに意義があるだけでなく、あくまで主観的性格を本質として自己の対象性を包含する重層的なものとして描かれたところに意義があるのではないか、ということ論じたい。

そのために、本発表では木村敏による西田を参照した精神病理論、およびそこで描かれる自己を検討する。木村によれば、統合失調症患者が抱く「私がない」という感覚は、自己を対象としてとらえられないと同時に、本質的には自己の主観的経験の確かさが失われることによる。木村は、臨床によって感得したこの自己の主観的経験の場面を、西田哲学に依拠して「あいだ」として概念化した。すなわち、木村にとって西田哲学は、自己を主観的に生きる場面と、それが対象的にとらえられる場面との両面から記述するために、欠かすことのできない論理であったのである。本発表はこうした木村の議論を通して、主観性により客観性を包含した自己のあり方を提示したものとして、西田の自己論の意義を見出したい。

研究発表 2

「非暴力の思想」の射程

——技術の選択を手がかりに——

松尾（鈴木）和光

自然から資源を取り出す手段を技術と呼ぶならば、その技術の選択は、われわれの生存を確保し、社会を持続可能なものとする上で非常に重要となる。そのことを改めてわれわれに教えたのが、二〇一一年三月一日に発生した東日本大震災とそれに続けて生じた福島第一原子力発電所の事故であった。東海地震の予想震源域であり、さらに浜岡原子力発電所が立地する静岡県に住むわれわれにとっては、同発電所を再稼動するか、あるいは廃炉するか、いかなる代替エネルギーを選択するかも含めて、いかなる技術により自然から資源を取り出すかは、差し迫った問題である。

技術は文化的・社会的環境との相互作用によって形成される。例えば、短期的に技術の選択に影響を与えるものとしては、コストや運用期間、法規制などが挙げられる。しかし、より根源的に技術の必要を意識させるものは、リン・ホワイ特が指摘するように「思想」であろう。福島第一原子力発電所の事故がもたらした結果を「暴力」的であると判断するならば、われわれは「非暴力」の思想に基づいて技術を選択するべきではないだろうか。

そこで筆者が注目するのが、ガンジーやシューマッハーが唱えた「非暴力の思想」である。シューマッハーは著書『スモール イズ ビューティフル』において、「本質的に暴力的」な大量生産の技術に対して、大衆による生産の技術を「中間技術」と名付け、低コストで効率的な技術の概念を提示した。さらに技術実践のグループを組織して、開発途上国でのその普及を図った。中間技術を特徴づける「現代の知識の最良のものを活用し、分散化を促進し、エコロジーの法則にそむかず、稀少な資源を乱費せず」という考え方は、稀少な資源の乱費による資源枯渇と環境汚染の問題に大きな責任を負う先進国においてこそ、いっそう重要である。

シューマッハーは、非暴力の思想を説くのにガンジーの言葉を度々引用しており、彼の影響を強く受けていたことは明らかである。シューマッハーがイギリスの石炭公社の顧問まで務めたビジネスマンであったのに対して、ガンジーはヒンズー教徒である母の影響を受けて育ち、また晩年には不可触民制の撤廃とヒンズー＝ムスリムの融和に取り組むという、ある意味で宗教的境涯に生きた人物である。こうした背景を踏まえると、シューマッハーが語る「非暴力」とガンジーのそれとは、完全に一致するものではなく、両者の間にはなんらかの差異があると予想される。シューマッハーとガンジーのそれぞれの論著を読み解くことで、両者の「非暴力の思想」の差異と共通点を明らかにし、究極的な理想としての「非暴力の思想」に対して、より世俗的で現実的な技術の選択のための考え方を提示することができるだろう。

以上の見通しのもと、非暴力の思想の射程について、技術の選択を手がかりに検討する。

研究発表 3

経験機械で快樂説をやっつけられるのか

米原 優（静岡大学）

よく知られているように、ロバート・ノージックは『アナーキー・国家・ユートピア』の中で、「経験機械」という思考実験を提示した。この思考実験は「快樂が、そして、そのみが、それ自体として望ましいものである」という快樂説への有力な反対論の一つと考えられている。しかし、ほんとうにそうだろうか。筆者が見る限り、この思考実験だけで、快樂説を否定することはできない。それどころか、快樂説に有利な証拠の一つとして使える（使われてしまう）可能性もある。そう言える理由を明らかにするのが本発表の目的である。

発表の構成は以下の通りである。まず、第一節において、人が経験機械を拒絶する理由に関するデ・ブリガードの見解を紹介する。彼が提示する理由は、ノージック自身が考えるのとは異なるものである。その上で、第二節では、行動経済学者であるトヴェルスキーとカーネマンの主張に従いつつ、人が経験機械につながれたくないと思う理由を、苦痛の回避という観点から説明する。さらに、第三節では、まず、何らかの苦痛を被ることなしに、ある快樂を獲得することはできないという状況において、快樂説に従った場合に、快樂の獲得と苦痛の回避のどちらが望ましいと判断されるのか、この問題に関するミルの主張を紹介する。そして、こうした判断方法に従えば、経験機械につながれたくないという人々の思いは、快樂説によって、理にかなったものと評価されると指摘する。その上で、快樂説は、経験機械に対する多くの人々の直観を肯定するものであり、この点で人々にとって歓迎すべき理論となる可能性がある」と論じる。最後に、結論で、経験機械という思考実験を使って快樂説を否定しようとする人が、以上で述べたような事態を避けたいのならば、どういった課題に取り組まなければならないのかを述べる。

シンポジウム「医療における意思決定と子の福祉」

提題 1：卵子提供を決めるまでの意志決定プロセス

白井千晶（静岡大学）

近年、日本においても妊娠・出産する人とは別の人の卵子による妊娠・出産（本報告では卵子提供と呼ぶ）が増大していると報道されている。また、日本人が海外で提供者（ドナー）になるケースが増大していることも報道されている。

いわゆる「第三者が関わる生殖技術」は、精子提供、卵子提供、代理懐胎を指す。現在日本においては法令による定めはなく、合法でも違法でもない。また、利用者や提供者、生まれた子や施術した医療機関および医師に関する記録を保管するシステムはなく、子どもが遺伝的ルーツをたどる仕組みもない。日本においてはいくつかの医療機関が独自の指針若しくは加盟する組織の指針に従って卵子提供の施術をおこなっているが、利用者自らが依頼・承諾を得た提供者のほかに、匿名の卵子提供バンクが設立されて実施が始まっている。また、仲介業者を介したり自らやり取りして海外に渡航し、卵子提供の施術を受けるケースもあり、把握されている数としては後者の方が多い（渡航先での施術の状況は、無法、合法、判例に準拠、法に抵触等さまざまである）。また、卵子提供に対する日本での意識・態度についてみると、最新の調査では、卵子提供を「認められる」としたのは 26%にとどまり、「認められない」39%、「どちらともいえない」35%と比較して、許容度は低いようである（NHK 調査、2014 年 10 月）。

このような日本の状況において、卵子提供の意志決定はどのようにされているのだろうか。本報告では、報告者が実施したインタビュー調査の中で、卵子提供を利用すると決めた 24 人（予定）の女性の語りにみる意志決定プロセスについて、質的分析をおこなった結果を報告する（卵子提供で母になった人 17 人、インタビュー時点で不成功・不成功の女性 7 人）。

自らの卵子を使用しないで妊娠することを決めていくとき、どのようなプロセスが見られるだろうか。社会の態度をどのように受け止めたり、内面化したり、抵抗したりしているだろうか。「生まれる子どもにとってどうか」という視点は、どのように織り込まれていくのだろうか。

当事者の実際が看過されたまま、倫理的議論や制度設計の議論がされていないだろうか。また、社会が当事者に求める「倫理的葛藤」についても議論ができたかと考えている。

提題 2：着床前診断をめぐるドイツの議論

——2011 年のドイツ倫理評議会答申を中心に——

小椋宗一郎（東海学院大学）

2015 年現在、日本においていわゆる「着床前スクリーニング」の臨床研究が進行中であり、技術的有効性の問題などとともに「命の選別」をめぐる倫理的問題として論争が続いている。利光恵子『受精卵診断と出生前診断——その導入をめぐる争いの現代史』（生活書院、2012 年）が描き出しているように、着床前診断をめぐる日本においても独特の論争と政治的動態が展開されてきた。そこで語られる諸言説には、当事者およびその家族の生活実感や倫理的洞察などの点で見るとべきものがあるのだが、人間存在をめぐる哲学的考察や、法体系における原則論的根拠づけ、また公的領域における討論の倫理という面では、ドイツの議論のなかに参考にすべき点が多くあると思われる。

ドイツにおける着床前診断(Präimplantationsdiagnostik)は、従来、胚保護法（1990 年）の解釈によって一般に違法であると認識されてきた。しかし 2010 年には、不妊治療を目的として着床前診断を実施した医師を無罪とする通常裁判所判決が下された。これをきっかけに議論が再燃し、2011 年 11 月 24 日には、着床前診断を原則禁止しながらも一部の例外については「違法でない(nicht rechtswidrig)」とする胚保護法改正法が公布された。その例外とは、第一に、その子どもに「重篤な遺伝性疾患」を生じるリスクの高い遺伝的素因をもつ人の配偶子によって、当事者の「妊娠を引き起こす目的で」体外受精により作成した胚につき、子宮内への移植の前に検査すること、第二に、「高い確率で死産または流産に至るような胚の重大な損傷を確認するために」行われる PID の場合である（胚保護法第 3 a 条）。

本発表では、ドイツにおける PID をめぐる論争を理解するために必要な経緯などを確認したうえで、第一に、上記の改正法が成立したからといって論争が決着したわけではなく、いつ再燃しても不思議ではないほど議論は対立したままであることを指摘したい。また第二に、倫理的議論のなかでも特に「同一性論」および「妊娠葛藤」に関係する議論に注目して、本邦での議論においても考慮すべき内容を模索したい。その際、おもに 2011 年 3 月 8 日に発表されたドイツ倫理評議会答申『着床前診断』（以下()内に同書のページ数を示す)を参照し、PID の全面的禁止を主張する陣営と部分的許容に賛成する陣営の見解を要覧するという方法をとりたい。

「同一性論(Identitätsargument)」とは、「胚と後々の成人との間には、道徳的な同一性の関係が存する」という主張である(S. 42)。2012 年に私が静岡大学哲学会で発表させていただいた際にも、R.シュペーマンの「人格」概念を取り上げたが、その議論とも密接に関連しつつ更に議論の展開を含む点に注目したい。「同一性」とは、基本的には発生から死までを貫く身体的および存在論的な同一性である。しかしそれは、卵子と精子の融合により成立した特有の遺伝的構成が、エピジェネティックな変化や母体との相互作用による影響を被り、さらには「心理社会的な同一性によって補完される」ことによって、たえず変化の中に自らを保つ「人生の歴史(Lebensgeschichte)としての同一性」であるとされる(ebd.)。こうした議論は、胚保護をめぐる立場の対立の中で新たな論争点を生み出すのだが、単に「受精卵は人か否か」が問題とされていた以前の議論とは質的に異なっている。

「妊娠葛藤」をめぐる議論は、着床前診断という文脈の中で、また新たな位置づけを獲得する。「着床前診断の限定的容認に賛成する意見」のなかでは、「親が重い病気や障がいに対する自らの遺伝的素因について知っていたり、すでに著しい健康障害に見舞われた子どもが生まれていたりする場合には、

子ども願望は実存的な苦境へとつながりうる」とされる (S. 80)。これに対して、「着床前診断の法的禁止に賛成する意見」のなかでは、「血のつながった自分の子がほしいという願いは尊重に値する。〔しかし〕その願望の実現のために生み出された複数の胚の中から、なぜ親が選択する権利をもつのかということ、この願望が根拠づけることはできない」とされる (S. 112)。激しく争われるのは、出生前診断と医学的適応に基づく妊娠中絶の場合、および「相談規定」に基づく中絶の場合と、着床前診断の場合との異同についてであるが、いずれの立場に立つにせよ「妊娠葛藤」が重要な役割を果たし、今後の法制や取り組みへと結びつく点が注目される。発表においては「生殖の自由」と諸個人の家族観の問題にも焦点を当てて議論を進めたい。

提題 3：子どもの「最善の利益」と医学的無益

加藤太喜子（岐阜医療科学大学）

わが国における小児の治療の差し控えと中止をめぐるのは、2004 年に出された「重篤な疾患を持つ新生児の家族と医療スタッフの話し合いのガイドライン」（「重症障害新生児医療のガイドライン及びハイリスク新生児の診断システムに関する総合的研究班（代表：田村正徳）」）と、2012 年に出された「重篤な疾患を持つ子どもの医療をめぐる話し合いのガイドライン」（「日本小児科学会倫理委員会小児終末期医療ガイドラインワーキンググループ（WG 委員長：加部一彦）」）が知られている。これら二つのガイドラインは、治療の差し控えや中止を行うべきか否かについて自動的に答えが導き出されることを目指すものではなく、話し合いという決定プロセスに力点を置き、児の最善の利益を共に考えることを目的としたガイドラインである。

他方で、2004 年の英国小児勅許学会ガイドライン『小児の生命維持治療を差し控えることまたは中止すること』は、「無益で負担の大きい治療を施す義務はない」と述べている。また、2010 年のオーストラリア蘇生協議会・ニュージーランド蘇生協議会は「無脳児や後遺症なき生存の可能性がほとんどない極端に未熟な児の場合、臨床家と父母は協力して、無益性・児の最善の利益に基づいて治療の差し控え又は中止の決定をすることができる」との見解を示している。つまり、その治療が無益（futile）かどうか、治療の差し控えや中止の判断基準の一つになりうるとする見方が存在する。

しかし、医学的無益という概念については対してはこれまで、①定義があいまい、②どこからが無益なのかの線引きが不明確、③医学的に無益と決定するのは誰か、④医学的に無益だという論点が、社会的に無益という論点とすり替えられやすい、⑤「全体として無益」という判断が困難といった、さまざまな疑問点が指摘されている。

本発表では、医学的無益はあくまでも子どもの最善の利益を考える際の一指標に過ぎないことを再確認したうえで、治療の目的を何とするか、なぜ無益だと考えるのかについて丁寧に話し合いを重ねることを通して、「医学的無益」という語を用いない形で調停することの可能性について検討する。最後に、子どもの生命がかかわる重大な決定に際して、合意形成型のプロセスアプローチに問題はないのかという点から私見を述べる。

提題 4：子どもをめぐる対話をもたらすもの

堂園俊彦（静岡大学）

生命をめぐる現代の倫理学には、大きく二つの傾向が見られる。一つは、話し合いを重視すること、そしてもう一つは、人間の尊厳を基軸に据えることである。

前者の特徴は、さまざまな場面において、多様なバックグラウンドをもった人による話し合いの必要性が述べられていることに示されている。例えば、日本小児科学会によるガイドライン「重篤な疾患を持つ子どもの医療をめぐる話し合いのガイドライン」(2012)では、「治療方針の決定にあたり、子ども・父母（保護者）と関係する多くの医療スタッフが、子どもの最善の利益について真摯に話し合い、それぞれの価値観や思いを共有して支え合い、パートナーシップを確立していくプロセスが最も重視されるべき」とされているのである。

他方「人間の尊厳」も、「ヒトに関するクローン技術等の規制に関する法律」(2001)といった先端科学技術の規制に加え、「社会福祉士及び介護福祉士法」(2007 改正)を通じて、日々のケアを支える基本理念となっている。それゆえ先のガイドラインにおいても、「ひとたび治療の差し控えや中止が決定された後でも、子どもの尊厳を護り最善の利益にかなう医療を追求する」と述べられているのである。

しかしながら、これら二つの傾向は、果たして両立できるものなのだろうか。一方において、話し合いを重視する背景には、ある存在の価値、さらにはその価値の具体的なあり方は、世界の側に事実として存在するのではなく、話し合いの結果として作られるものなのだという前提があるように思われる。そしてこの前提は、「価値観」という表現が日常的に用いられていることから、広く受け入れられている。だが、この前提が人間自身にも適用されるなら、人間の尊厳、とりわけ胎児や小児のように話し合いに参加できない存在の尊厳も、話し合う人次第ということにならないだろうか。しかし人間の尊厳をこのように理解することには、大きな問題がつかまとう。なぜなら「人間の尊厳」とは、周りの人間がどのように考えようとも、奪うことができず、守られなければならない価値が人間にはあるのだという思想だからである。このように、「人間の尊厳」と「話し合い」の間には、緊張関係が存在する。

本発表では、以上のような問題意識のもと、話し合い（討議）を倫理学の中心に据える、ユルゲン・ハーバーマスの討議倫理の検討を通じて、話し合いと人間の尊厳——とりわけ話し合いに参加できない存在の尊厳——との関わりについて検討する。